

平成 30 年 5 月 8 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370034

研究課題名(和文) ジャック・デリダと精神分析の諸問題

研究課題名(英文) Jacques Derrida and the Questions of psychoanalysis

研究代表者

守中 高明 (MORINAKA, Takaaki)

早稲田大学・法学大学院・教授

研究者番号：80339655

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：現代フランスの哲学者ジャック・デリダが精神分析学とのあいだに切り結んでいる深く錯綜した諸関係を網羅的に読み解き、その成果を単著『ジャック・デリダと精神分析 耳・秘密・灰そして主権』(岩波書店、2016年、全258ページ)として刊行した。また、晩年のデリダの最重要の問題系である「赦し」についてのつぎの著書を詳細な解説論文を付して翻訳・刊行した：『赦すこと 赦し得ぬものと時効にかかり得ぬもの』(未来社、2015年、全140ページ)。

その他、デリダ没後10周年を記念して開催された大規模シンポジウムにおいて発表を行い、その成果は現代哲学専門誌の特集号に収録された。

研究成果の概要(英文)：I conducted exhaustive research on the deep and complicated relation that the modern French philosopher, Jacques Derrida, forms with psychoanalysis, and I published the results in a book entitled, "Jacques Derrida and the Psychoanalysis: Ears, Secrecy, Ashes and Sovereignty" (Iwanami Shoten Publishers, 2016, 258 pages). And I also published a translation of one of the most important last works of Derrida, "On Forgiveness: The Unforgivable and the Imprescriptible" (Miraisha Publishers, 2015, 140 pages) with a long and detailed commentary.

In addition, I read a paper at a comprehensive symposium to commemorate Derrida's achievements, held on the 10th anniversary of the death of this philosopher, and this was printed in a special issue of a modern philosophical journal.

研究分野：人文学(哲学・倫理学)

キーワード：フランス現代哲学 精神分析学 脱構築 ジャック・デリダ ジークムント・フロイト ジャック・ラカン ニコラ・アブラハム

### 1. 研究開始当初の背景

日本におけるジャック・デリダ研究は、2000年代に入って大きな深化と発展を見せた。初期の哲学論文をまとめた『哲学の余白』（1972年：邦訳2007年〔上巻〕、2008年〔下巻〕）や、プラトン、マラルメ、フィリップ・ソレルスの読解を通してその「エクリチュール」概念を錬成した『散種』（1972年：邦訳2013年）などが翻訳されることで、デリダの初期の著作群のほぼすべてに日本語で接近できるようになった一方、後期から最晩年の著作群、たとえば唯一のマルクス論である『マルクスの亡霊たち』（1993年：邦訳2007年）や、哲学史上の「友愛」の問題系を論ずる『友愛のポリティックス』（1994年：邦訳2003年）、「9・11事件」の衝撃を受けて、しかし厳密に哲学的に「主権」の脱構築を試みた『ならず者たち』（2003年：邦訳2009年）などが翻訳されることにより、いわゆる「倫理的 政治学的転回」以後のデリダの思考の骨子も辿れるようになった。

しかし、こうしたデリダ受容史・研究史において大きな欠落が見られたのが精神分析学の文脈におけるデリダの仕事をめぐるであった。大著『弔鐘』（1974年）はその翻訳が部分的に進められたが中断したままであり、またその全体が精神分析に関連づけられた『郵便葉書 ソクラテスからフロイトへ、そしてその彼方』（1980年）も部分的に紹介されているだけであった。そして翻訳・紹介が途上であるだけでなく、デリダと精神分析との関係のみに焦点化した研究書・著作は依然として皆無であった。

報告者は、こうした状況をふまえ、この欠落を埋めることが急務であり、現在および将来のデリダ理解に大きく寄与し得ると考え、本研究を計画し、作業に着手した。

### 2. 研究の目的

デリダの遺した膨大な著作群の中から、精神分析学との関連を抽出・分析・検討・解読し、プラトンからハイデガーに至る西洋形而上学 哲学の全伝統を対象として遂行されたそのきわめて高度で緻密な「脱構築」の作業が、精神分析学から何をどのように取り込み、批判的に乗り越えつつ発展させているかを明らかにすることを目的とした。とりわけ、中期の大著『弔鐘』（1974年）や『郵便葉書 ソクラテスからフロイトへ、そしてその彼方』（1980年）などにおけるフロイト、ラカン、ニコラ・アブラハムらとの批判的対決と、そこから新たに生み出された未聞の哲学的 精神分析学的諸概念を精密に読み解き、欧米においても日本においても先行研究のほとんど存在しないこの問題系へ可能なかぎり貢献することを目指した。

### 3. 研究の方法

デリダの著作群を、初期の3部作『声と現象』、『エクリチュールと差異』、『グラマトロ

ジーについて』（いずれも1967年）を手始めに、精神分析への明示的・暗示的関わりのすべてに留意しながら読み直し、デリダの概念形成にフロイトが及ぼした影響を整理したうえで、中期の大著『弔鐘』（1974年）および『郵便葉書 ソクラテスからフロイトへ、そしてその彼方』（1980年）などで展開されたパフォーマンス的なエクリチュールにおいて、著者および読者の心的エネルギーと情動がどのように触発され組織化され、あるいは組織解体されるかを注意深く読み解いた。そしてフロイトのみならず、ジャック・ラカン、ニコラ・アブラハムらとの批判的対決がデリダにとっていかに排他的に重要な課題であったかを、最晩年の著作に至るまで網羅的かつ入念に分析した。

### 4. 研究成果

本研究は、デリダがその最初期から最晩年に至る思考の全行程において精神分析学とのあいだに深く複雑な関係を持ち続け、その批判的対決がいくつものまったく新しい哲学的概念を生み出したことを初めて整理・明確化し、さらに発展的考察を加えた点で、高い独創性を有する。とりわけ「項目5：主な発表論文等」に記す著書は、この領域における日本で初のまとまった成果であり、永く参照される基礎文献となることが期待される。

(1) 初期デリダにおける基本概念とフロイトにおける基本概念の関係：デリダが錬成した「脱構築」の戦略における「差延」「エクリチュール」「原 痕跡」などの概念とフロイトの精神分析理論における「痕跡」「事後性」「不気味なもの」などがいかに密接に関連しているかを分析・検討し、フロイト的精神分析がその可能性の中心において捉えられるとき、現代における俗化された理解に反して、すぐれて「脱構築」的性質をそなえていることを明らかにすることができた。

(2) ジャック・ラカンの精神分析理論のデリダによる批判：ラカンの精神分析理論における「ファロス ロゴス中心主義」が脱構築される場面として「転移」「翻訳」「固有名」の概念に焦点化し、いまだ名づけられざる「デリダ的精神分析学」ないし「脱構築と(しての)精神分析学」の輪郭を初めて明瞭に描き出すことに成功した。

(3) 精神分析学と「司牧制」：現代的精神分析の実践が、キリスト教における「司牧制」、とりわけ罪の告白=告解の伝統と不可分であることをミシェル・フーコーによる系譜学的分析を参照して明らかにしたのち、その制度への抵抗としてデリダ特有の「秘密」概念が定位され得ることを明示した。

(4) 現代精神分析学の革新的概念としての「クリプト」：ニコラ・アブラハム&マリア・トロークによって概念形成され、デリダによって再 錬成された「クリプト(地下墓所)」という非 局所論的トポスをめぐって、その「脱構築」的諸効果とそれによる無意識の世

代間伝達の問題を明らかにした。とりわけ戦争のトラウマと諸世代を貫通するその無意識的継承の問いを検証することを通して、新たな歴史記述の方法論の可能性を説き、その到来を要請した。

(5)「喪の作業」の再定義：フロイトによって提出された対象喪失後の精神の回復プロセスとしての「喪の作業」の概念が、デリダにおいていかに拡張され、一個人の生の時間内では完結しない「終わりなき喪」、「不可能な喪」へとどのように転位されているかを検討した。ここでもまた、「アウシュヴィッツ以後」の記憶と忘却の政治学を、そして他者の他者性をけっして消去しない新たな喪の倫理学の理論を構築した。

(6)ヘーゲル的 父性 原理の脱構築：デリダの大著『弔鐘』(1974年)のうちで、「家族的人倫」を論ずる際にいわば機械状の交叉配列を形成しているギリシア悲劇『アンティゴネー』とヘーゲル『精神現象学』それぞれの読解において、父性 の権能がいかにして問題化されているかを分析した。ヘーゲルの弁証法を駆動させる 父性 原理は、ソフォクレスの描くアンティゴネーの 妹性 としてジャン・ジュネの描く 母性 という二重の 女性 原理によって、どのような機能不全に陥り、どのように「脱構築」されるのかを緻密に読み解いた。

(7)「主権」概念の再検討：晩年のデリダにおける最大の問題系である「主権」概念の脱構築がいかなる理論的角度からなされているか、とりわけフロイト ラカンの精神分析理論がそこでどのような役割を演じているかを分析した。

その際、一方に「歓待」の問題系があった。一つの国民国家が、あるいは諸国家からなる共同体が、外部からやって来る他者を、それも「グローバル化」した世界の中でみずからその発生に政治的に関与していないとは言えない、しかしまったく異質な文化的背景を持つ他者たちの到来をいかに受け容れるべきか。シリア内戦の開始直後から EU 諸国が大量の難民発生の問題に直面したことは記憶に新しい。本来の住処を失い、迫害あるいは追放され、文字どおり生存を賭けて他国への境界の扉を叩く他者たちを、別の主権国家がいかにして迎え入れ、その生存と未来を保証するか。この問いに対しては、精神分析学の知のうち、分析家の権能の「脱構築」が示唆を与えてくれる。分析家がみずからの「主権」を解体し、その「自権性」さえをも解除するとき、「転移」関係が内包する権力構造は縮減される。分析家がプラトンの言う「コーラ」のごとき場なき場としてみずからを差し出し、他者のすべてを受容しすべてを語らしめることができたとき、それは条件なき絶対的歓待への一歩となることを明らかにした。

他方に「民主主義」の問題があった。民主主義(デモクラシー)とは、人民(デモス)

が人民を人民の力(クラトス)によって統治する制度である。そこには本来、君主や宗教的一者などの外部の準拠対象は存在しない。それは純然たる自己準拠的システムである。ところが、主権的国家において、デモスたちはしばしば、ちょうどラカンのシニフィアン(記号表現)がファロスという特権的シニフィアンから出発しかつそこへと立ち戻る循環的行程を辿ると同じように、主権によって中心化された体系の内部に回収されてしまう。それゆえに、来たるべき民主主義における人民(デモス)は、デリダが「散種」と名づけた終わりなき散逸を生きる誰かであるべきだというテーゼが有効性を持つ。ファロスという唯一の宛先=目的を解除され、体系なき普遍性の地平へと向かう主体ならぬ行為体たち その多数多様性が留保なく肯定されるとき、主権という怪物的権能が中断され得ることを多角的に分析し論証した。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

(1) 守中高明「ファロス・亡霊・天皇制 ジャック・デリダと中上健次」、『現代思想』2015年2月臨時増刊号、『総特集デリダ 10年目の遺産相続』、第43巻第2号、pp.322-344、査読無。

(2) 守中高明「ジャック・デリダと精神分析 耳について(上)」、『思想』第1102号、2016年2月、pp.25-40、査読無。

(3) 守中高明「ジャック・デリダと精神分析 耳について(下)」、『思想』第1103号、2016年3月、pp.125-139、査読無。

〔学会発表〕(計1件)

(1) 守中高明「ファロス・亡霊・天皇制 ジャック・デリダと中上健次」、於『ジャック・デリダ没後 10年シンポジウム』2014年11月22日~24日、早稲田大学・小野記念講堂、11月22日「デリダとエクリチュール」内での発表。

〔図書〕(計3件)

(1) 守中高明『ジャック・デリダと精神分析 耳・秘密・灰そして主権』、岩波書店、2016年、全258ページ。

(2) 守中高明監修/ジャック・デリダ+豊崎光一『翻訳そして/あるいはパフォーマティヴ 脱構築をめぐる対話』、法政大学出版局、2016年、全177ページ。付・解説論文：守中高明「哲学・翻訳・パフォーマティヴ Living on borderlines.」pp.145-172。

(3) 守中高明訳/ジャック・デリダ『赦すこと 赦し得ぬものと時効にかかり得ぬもの』、未来社、2015年、全140ページ。付・解説論文：守中高明「不可能なることの切迫 来たるべき赦しの倫理学のために」pp.

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者 守中 高明  
(MORINAKA, Takaaki)  
早稲田大学・法学学術院・教授

研究者番号：80339655

(2)研究分担者  
( )

研究者番号：

(3)連携研究者  
( )

研究者番号：

(4)研究協力者  
( )